

た。十四年、我々初年兵は関西地方、二年兵は関東、三年兵は東北地方の兵隊だった。満州の歩兵八十九連隊は、第二十四師団(山兵団)で沖繩で玉砕している。現役時代の戦友たちは、サイパンや沖繩で玉砕している。私がもし、徳島でマラリアが再発しなければ、召集兵たちと一緒に沖繩の途中で、ボカ沈を喰って死んでいる。

同年兵や、同じ部隊の戦友たちは、ノモンハンで生き残り、その後玉砕した者が多い。内地で教育した兵隊も、今生き残っているのは四名だけだという。だから私は、生きている限り、毎年慰霊祭に出席しているのです。

戦争と霊(魂)

静岡県 吉田 峯 康

「吉田さんは徴兵検査でエピソードがあったと聞きましたか。」

昭和十三年八月一日、山梨県南巨摩郡楡沢町立小学校講堂にて晴れの徴兵検査が行われました。一通りの検査が終わり、やがて徴兵司令官の前に立った。その時司令官は検査結果の書類を見ながら一人言のように「二寸二分か」という声が聞こえた。当時は甲種合格は五尺二寸以上であったそうです。

私は司令官の顔を睨み付けながら大声で「司令官殿、山椒は小粒でぴりりと辛いです」と思わず叫ぶように申しました。むずかしい顔をしていた司令官は思わずニッコリ「よし気に入った。甲種合格」と丸型の判を力強く押した。

やがて検査もとどこうりなく終わり、司令官の本日の講評が行われた。種々の話がありましたがおその中で一段と声張り上げて、

「本官は何十回となく徴兵検査を行って来たが、本官の顔を睨み付けて、甲種合格を要望されたのは初めてだ。これからの若者はこの位の気魄がなければならぬ。これ偏えに村長の指導宜敷きにある」

と思わぬところで村長も褒められ、早速村へ電話を

掛けたそうです。

村の駅に着きますと何と在郷軍人やら村役場のお偉方に出迎えられ、大変な喜びようでした。この時私の肝に兵隊魂がしっかりと根付いたものと思われます。

昭和十三年十二月一日、晴れの入営。十日に軍用列車で品川駅を出発。この時に、後に出て参ります兄二人が品川駅まで見送りに来てくれまして「峯康元気でな！死ぬなよ」と叫び、お互い指先だけ触れ合ったのがこの世の別れになったのでした。

十五日、湊川神社に必勝祈願を致し、神戸港を出港したのでした。それより北満に渡り匪賊討伐や国境警備、関特演と多事多彩でしたが、一期の検閲を目前に控えた二月二十一日の夜、日中の厳しい訓練で心身共に疲れ果て五尺の寝台に潜り込むと同時に深い眠りに落ち入りました。

ところが夢の中で、品川駅で私を見送って下された下の兄・寿夫が北満の我々の兵舎、屋外は零下四〇度もあろうというのに溝に顔を押し付け、顔に血と水がひたひたと流れている。私は動転して「寿夫兄ちゃん

を殺した奴は誰だ、俺がこれから仇を打つのだ」といって兵舎へ飛び込み、鉄兜をかむり防毒マスクを腰に付け銃を持って何でか、洗面所へ走って行った。そしてたらそこに上の平八郎兄が同じような状態で顔から血と水が流れている。「おい吉田、何をうなされてるか、どうした」と肩を叩いて起こしてくれたのは战友の長谷川上等兵殿だった。私は我に帰り、ああ悪い夢を見たと思ったが私はえたいの知れぬ高熱を出していた。長谷川上等兵は驚いて自分で直接週番士官を呼び、早速検温したら四〇度あった。折良く週番士官は我々の教官で、幼年学校より士官になった坂初彦少尉殿だ。担架が用意され医務室に運ばれて訳の解らぬ薬をのまされたり、やたらに痛い注射をされたり、それでも熱は一向に下がらない。

三日目によくやく八度五分まで熱が下がったので、軍医殿に頼んで退院をお願いした。診断の結果は急性気管支炎ということで一週間の安静を命ぜられた。だが私は一期の検閲のことを思うとも立ってもしられない状態だった。幸い長谷川上等兵殿が見舞に来て

下されたので「何とか退院を教官殿に頼んでくれ」と頼みましたら、中隊の人事係島津准尉殿がわざわざ来られて「お前も選抜組に予定されているので、検閲が気になるのだから、出来る自信があるならやつて見ろ」とのことで、四日目より軍務に服しました。しかし微熱は七度五分より下がらず苦しい訓練の連続でした。

それから半月程して中隊事務所へ呼ばれ、人事係の島津准尉、教官の坂少尉、中隊長内藤中尉等に訊問され「お前何か心配事でもあるのか。何か悩みごとでも」と執拗に問いかけられた。

実は私が悪夢に襲われた二月二十一日夜九時三十分頃、私の郷里より大宮町（現在の富士宮市）の醤油屋へ薪を納めるべくトラックに荷物を満載して、運転手が僅かな時間が惜しくて芝川吊橋を通過しようとした。ところが車が橋の中央辺まで来た時に橋が大きく揺れ始め、進むことも退くことも出来なくなった。

荷物の上に乗っていた若者は危険を察知していち早く車から飛び降り一命を取り止めたので、詳細が後で

解ったのですが、橋が真二つに切れ、トラックは下の溪流に落ちた。私が夢で見たような姿で二人の兄は亡くなったのであります。

当時、私の長兄は小学校の校長をしておりましたが、当時の様子を事細かに中隊長殿に書き綴り、

「峯康は御国に捧げた体故、いかようなことを知らせて良いものやら、そのために軍務がおろそかになったのはお国のために申し訳ない。中隊長殿にすべてお任せ致しますので何卒宜しく御配慮の程を」

という意味の手紙が行っていたそうです。中隊の中では兄二人が一度に不慮の災難に遭ったのだから一時帰休させたらという意見も出たそうですが、この災害を本人に直接知らせない長兄の心痛は誠に立派なものだ。さすがに校長だけのことはあるとの中隊長の決断で、私には人間の言葉として聞かされなくとも魂の声

が私に伝えて下さいました。

二人の兄さんが、夢枕に立って、知らせたということですね、現実

です。ね。

しかし、私の不運な軍隊生活がこれから始まるのです。ノモンハン事変以来、これからの戦いは科学兵器でなければ駄目だ。騎兵は縮少すべきであるとのこと、我々大隊は黒河省孫呉に転属、輜重兵第一連隊に配属されました。

昭和十五年四月、突然非常呼集で全員連隊広場において連隊長浅倉大佐殿の訓示があり、内地より十日以内に補充兵が多数到着の予定であるから各中隊は戦時編成の準備をするようにとの事で、内容については一切説明はなかった。将校は連日将校集会所でなにやら会議の連続。

一週間もしないうちに山海関方面より支那馬約八〇〇頭が列車で輸送され、その仮厩舎造りに連日の徹夜作業が続く。折しも戦時編成の名簿が発表され、古参上等兵は上級職を命ぜられ、班長に一等兵三名、補充兵二〇名三個班を以って一個分隊とし、分隊長は古参伍長もしくは若手軍曹。しかも、私は第一中隊第一分隊長付第一班長と、班長の編成表を見た時は正に天に

も昇るような気持ちでした。

四月中旬、補充兵も到着、貨客軍用列車に乗せられ行先も告げられず、列車の窓は全部閉められ、食事受領の時、車外をチラッと見た時瓊瑋であることが解った。車内ではいろいろと噂が流れ、南方だとか、北支だとか聞いていたが、私はこれはソ満国境だなど直感した。

馬を乗せているので大量の水が必要だ。馬には一日に少なくとも五リットル以上の水を飲ませないと、馬独特の疝痛、つまり糞つまりとなり、それが原因で死ぬこともある。例えば支那馬でも陛下よりお預かり致している動物兵器である。

瓊瑋の少し北に神武屯という駅がある。そこで馬糧と水を充分補給し、我々にも食糧が三食分支給された。黒河までは数時間で行けるはずなのに、おかしいなと思っていたら、列車は逆行を始めた。何処へ行くのかと思っていたら駅らしいものはない。軍専用の鉄道に入り十数時間したら列車は止まって、下車命令が下った。

そこは特別の司令部のある山神府で、我々は北川工兵少佐の指揮下に入り、工兵二個大隊、輜重一個中隊、歩兵一個小隊という混成部隊となって工兵、資材、食糧、弾薬を満載し道なき道を難行し、二十数時間をついやしてようやく着いた所が納金口子という、部落といつても民家は数軒しかない所だ。

そこを北川部隊の拠点とし、早速幕舎を張り、工兵の建設部隊の手により仮設小屋も出来た。当地は地名で判るように、この地区は興安嶺の続きで砂金が沢山採れた所だそうで、砂金を納めた所と通訳から説明された。

ここ大成金廠よりさらに三〇キロぐらい北に三道湾子という所がある。黒竜江をへだててソ連軍のトーチカが二〇数基位見える。そこへ我が軍でも大規模な陣地を築くことになり、毎日のようにセメントや鉄筋、弾薬を運んだ。ある日のこと、資材を運び日暮れも迫った頃、私は部下に全員乗車を命じ帰路を急いだ。

ふと見ると後方より三両目の車に変な動きをしている。急いで行って見ると遊導桿がない。これは自動車

でいったらハンドルのような物で、このまま走行を続けたら馬に鞍傷を起こすこと間違いなしと見、即刻停車を命じた。

輜重車の一部分とはいえ陸下から預かった兵器の一部だ。それに馬にまで傷を負わせたら一大事と斎藤上等兵に指揮を命じ、帰營させ事故車の側に上杉一等兵を付き添わせた。この辺りはゲリラの出没の激しいところ故、低い所に身を隠すよう命じ、私はまた元来た路を一目散に駆け戻り、天に祈るような思いで遊導桿を探し求めた。

日はだんだんに暮れ、気はあせるばかり、三、四キロ位戻った所に小川があった。私は直感的にこの小川を渡った時車輪に何か起こったのではないかと思い、川の中を眼を皿のようにして探した。「あった」川の中ほどにかすかに光る遊導桿を発見した。

その時の気持、我を忘れて馬より飛び降り、それを拾い上げ大急ぎで元の場所へ戻った。事故者市川二等兵は涙をこぼして喜んだ。幸いに馬の背に鞍傷もなく無事帰營することが出来、中隊長引地中尉は苦笑で私

の取った処置をほめて下された。

「軍隊は兵器に対する責任は大きい、部下も上官も責任を負わねばならない。」

北満の冬は早く、十月下旬ともなれば地面はカチカチに凍りつき馬の蹄鉄にも鋸を打たなければ馬も歩けないような季節となる。十一月二日だったと思います、明日にも兵長に進級かと思った日、衛兵司令の勤務についた。上番、中番と異状なく、後数時間で衛兵勤務も終わろうとした時、既当番が血相変えて飛び込んできた。

「衛兵司令殿大変です。馬が死んでおります」私も驚き当番兵と共に厩舎に来て見れば何と馬が首を吊っている。山海関の方から連れて来た馬で、前脚で凍った土をかき上げ、自然そこに小さな山が出来る。その凍った山に乗って滑ったのであろう。大靱手綱で首を絡め、苦しいので暴れて又余計強く締め付けられ死に至ったものと思われる。しかし、これ程苦しがつているのだから余程大きな物音がしたはずであろうにと、良く事情を聞いて見ると、当番が他の厩舎に行った間

の出来事だという。しかもこの兵が私の班の兵隊なので結局責任は私のところへ来る。私は重営倉は覚悟していた。

翌日、北川少佐殿に呼ばれたが意外にも少佐はおだやかな顔をなさって「大変なことになったな、しかしお前の勤務状態は非常に宜しい。原隊よりの内申書も大変良いので引地中尉とも話した。獣医とも相談の結果、事故死として置くが、責任上、昇格中止処分ということでどうかね」ということで寛大な処置で納めて下さった。

後で聞いた話のだが、兄二人を一時に亡くなった時も一時帰休もせず、軍務に専念したこと等が評価され、昭和十七年四月、四年兵と共に内地へ帰され、習志野の元騎兵第十五連隊跡で除隊前日、人事係准尉殿に呼ばれ「お前の家の事情も原隊よりの事情書により、良く解った。大変遅れたが陸軍兵長に進級する」とのお言葉と同時に寝蓑一本（兵長）の肩章を戴いた。

思えばあのまま闊特演で軍務に服していたら、昭和十八年十一月、第一師団はフィリピン、ルソン戦線に

加わり、全滅したと思う。二人の兄が私の身代わりになってくれたものと、七十四歳になった今でも兄の墓参をする時、私の軍隊生活の数々が走馬燈のように私の脳裡を走ります。

― 数奇な体験ですが、馬の事故死が無く、任官したり、現役志願し下士官になっていたら、恐らく、ルソンへ行つて玉碎したことでしょう。二人の兄さんに助けられたことですね。

私の戦中、戦後の思い出

山口県 森 重 清

― 本日はお忙しいところを御出で下さいまして有難うございます。森重さんは、どちらへ行かれましたか。

私は大正十三年生まれです。支那事変に引き続く大東亜戦争の開戦に伴って、私等中学生も昭和十六年十二月に繰り上げ卒業になりましたが、満二十歳までの

三年間は今の三菱レイヨン、当時は日本化成という会社勤めていました。

月給五〇円でした。昭和十九年に満二十歳になり、徴兵検査を山口県柳井町で受けましたが第二乙種合格でした。

― その頃は第二乙でも現役入隊になったんですね。はい。ですから昭和十九年の十月一日に広島第五師団輜重兵第五連隊（第十部隊）に仮入隊し、赤飯でお祝いして貰った時は嬉しかったですね。

一週間たったら満州第一三三一部隊（第一一二師団工兵隊）に転属となり、満州から新兵受領にきた軍人に引率されて宇品から軍用船に乗せられ、満州東南部のソ満国境に近い琿春の部隊に着いた時も、二、三日は赤飯が飯上げになり、このような献立てが続いたので軍隊という所は案に相違して御馳走してくれる良いところだなあと思いました。実は赤飯だと思ったのは高粱（コウリヤン）飯だったんですね。

新兵を迎えて、お客様扱いも二日間だけ、そのあとは事あるごとに「貴様らは一銭五厘でいくらでも補充